夕焼け通信 1375号　2022.11.7
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）121

木幡智恵美

冬（2）

ついに冬将軍がやってきた。十二月も半ばを過ぎたから当然だ。敷布団を二枚にして寝たけれど、夜中は風の音でなかなか眠れず、何本も夢を見た。布団の中に居たいのに眠れもしないので早くから台所に降り、朝食を摂ってから夕飯の下ごしらえに取り掛かる。この日は実歩のクラスの発表会で、娘が見に行っている間、寛大と宗矢とで留守番をすることになっている。薄っすらと雪化粧した道を、夫に送ってもらって玉湯に行った。

娘たちを送り出してから、寛大と宗矢と一緒に二階に上がり、おもちゃ部屋で遊ぶ。車を動かしたり、ブロックを組み立てたり壊したり。それに飽きてくると、寛大は、「外に出て、雪で遊びたい」と言い出し、「ちゅう」と宗矢も同調する。仕方なくジャンバーを着せ、手袋をさせて長靴で庭に出た。大した積雪ではないけれど、子どもにとって魅力的な雪だ。二人とも雪の上を歩き回り、雪団子を作って遊んだ。手袋がびしょびしょになったので家の中に入り、冷えた身体を暖める。しばらくして、娘と実歩が帰って来、スマホで撮った発表会の動画を皆で見た。その日の最高気温は五、二度。寛大と宗矢を外で遊ばせたけど、風邪などひいていなければよいが。

次の週は、今年最後の連続。水曜日の点訳の勉強会に参加し、夜は転勤するSさんが松江道場での最後の日とあって、少し痛むお腹が気になりつつ稽古に出た。翌日は出雲に年末の掃除に出かけることにしていたので、くすくす痛む腹をなだめながら、夫と分担して掃除を済ませる。翌金曜日は、今年最後の手話教室。クリスマス会のゲーム担当になっていたので、何とか役目を果たし家に帰った。残り物で昼食を摂った後、寒気がするので熱を測ると三十八度ある。これまでは動くと響くくらいだったのが、じっとしていても腹が痛む。かかりつけ医に診てもらうと、胃腸炎とのことで整腸剤と痛み止めを処方してもらった。クリスマスイブなので、チキンを焼き、ロールケーキを作ったが、私はおじやがやっとだった。

腹の不調は長引き、土曜日、翌週月曜日の寛大との留守番は夫に替わってもらった。年末、長男が二年半ぶりに帰って来る。それまでには絶対に治さなくては。

がらがら橋日記

宮森健次

柿

柿が色づいてきたけど取りに来ませんか。と奥出雲から便りが届いた。差出人のTさんは、ぼくの柿好きをよく知っていて、これまでも何度も取らせてもらっている。二つ返事で行く日を伝えた。

「まいがあ（うまいよねえ）。果物ん中で、柿がいちばんまいがあ。」

子どものころ、晩秋ともなると、夕食後、母は柿の皮をむいて兄とぼくに食べさせながら、そう言うのが常だった。甘みも酸味ももっと強い果物がいくらもあるので、そうかなあと疑いつつ相づちをうっていた。小学校四年生の時、道徳の勉強で副読本を読んでいたら、何だか似たような場面が出てきた。おじいさんと孫が柿を前にして話している。

「おいしいね。おじいちゃん。」

「そうだなあ。柿はなんと言っても果物の王様じゃからな。」

これは母に伝えなくては、と家に帰るとすぐに言った。母は我が意を得たりという表情で、

「そげでしょう（言ったとおりでしょう）。」

と言った。酸っぱい果物を好まなかった母とは異なり、ぼくはどんな果物でもおいしいと思うのだが、柿のうまさは年を取るにつれて増していくように思える。まだそんな場面は訪れないが、副読本みたいに孫に問われれば、柿を王様に譬えたいと思う。

柿が好き、というのは、柿の色が好きというのもある。熟れるに従って緑や黄色をところどころに残しながら朱が刺してきて、やがてそれが自ら光りでもするように色を強め、最後には徐々に光量を絞りながら深紅へと移ろっていく。最もエネルギーに満ちたときの、柿色としか言い様のないあの色がやはり好きだ。登山用のザックにその名もパーシモンを見つけたときは、柿色というだけで迷わず買った。

今年は生り年のようで、並べたバケツも籠もみるみるいっぱいになっていった。

「去年は辛いことばかりが重なって、柿が実を付けていることさえわかりませんでした。実が小さいのはそのせいかもしれません。」

ぼくが次々と落とす実を拾いながら、Tさんは言った。幸せ色とでも呼びたいような柿色が心にとまらなくなる時がこれから幾度かぼくにも訪れるのだろう。

どっさり持ち帰った柿を毎日食べている。生食だけでは食べ切れないので、サラダに酢の物はもとより、干し柿、柿プリン、柿ポタージュ…と楽しんでいる。意外なのがプリンで、牛乳と混ぜて冷やすだけで味や食感がプリンそのものになる。レシピご希望の方はお知らせください。ネットで見つかりますが。

30代フリーター　やあ、ジイさん。習近平の総書記3期目入りが決まったとき、中国のIT関連の株価が軒並み下落したと報じられた（10月26日朝日新聞朝刊）。

年金生活者　これまで共産党1党独裁を正当化してきた経済の発展を犠牲にしてでも、習の1人独裁、言い換えれば「皇帝」化を進めたほうが国民を支配しやすい、と習のまわりも判断したと理解することができる。

「改革開放」は国民に経済的な自由、すなわち消費の自由、職業選択の自由、移動の自由などを与えた。その結果、国民は国家に寄りかからなくても生活していけるという自立意識を持ち始めた。そんな国民にさらに自由を与えれば、ますます国家を頼りにしなくなる。独裁者にとっては都合の悪いことだ。

これまでは経済成長の速度が速かったため、国民は将来に期待を持ちやすかった。だから共産党を支持してきた。これからは成長が鈍化する。経済だけでは共産党への支持をつなぎ留められなくなる。国家の強権が必要になる。「皇帝」の権威を示し、「帝国」の体制をさらに強固にしなければならない。習はそう考えているに違いない。

30代　経済の発展が民主化を促すと思われていたのに、逆に民主主義を遠ざけるばかりだ。

年金　近代は「帝国」を衰退させたあと、復活させた。「国民国家」という「平等」のシステムが社会主義国家の形を取って「帝国」としてのソ連を成立させ、「グローバル資本主義」という「自由」のシステムが「帝国」としての中国を膨張させた。これは近代が前近代の残滓を一掃できなかったということとは違う。近代が前近代を活性化させ、それを利用している、と言ったほうが真実に近い。

近代のシステムの土台をなす資本主義は、労働者を搾取の対象としてだけでなく、生産した商品の買い手として必要としている。搾取するだけでは、労働者は商品を買えなくなるから、富を再分配しなければならない。そのためには社会保障政策が必要だ。それに向けて国家の尻をたたく役回りを資本主義は「平等」の旗を掲げるソ連に与えた。

第1次世界大戦ですっかり弱った「帝国」としてのロシアが社会主義を制度化することによって新装の「帝国」として復活したのがソ連だ。富の再分配には「自由」のある「国民国家」よりも強権的な「帝国」のほうが適している。西側の「国民国家」は対抗上、社会保障政策を拡張せざるを得なかった。ソ連「帝国」と西側陣営が戦った東西冷戦は、核による威嚇力と抑止力を競うと同時に、自国民をどれだけ豊かにしたかを競い合う戦いだったからだ。

30代　今の中国も新装の「帝国」というわけか。

年金　現在の資本主義は新たな利潤の源泉を求めて社会のデジタル化、AI化を進めている真っ最中だ。それには国民を全員そのシステムの中に組み込み、ひとりひとりの振る舞いを追跡できるようにするのが一番いい。その推進には富の再分配の場合と同様、強権的な「帝国」のほうが適している。プライバシーを重んじる西側諸国は遅れを取らざるを得ない。そこで資本主義は「帝国」の中国を先行させることによって西側の対抗心を起動させ、目的を達成しようとしているように見える。

30代　まわりくどいことをするもんだ。

年金　古い時代に支配的だった社会の基本システムは、時代が新しくなったとき、消滅するのではなく、あるいは残滓としてだけ残るのではなく、新しい時代に必須のシステムのひとつとして存続する。それを明らかにしたのが柄谷行人の交換様式論だ。

柄谷はこれまでの歴史に登場した交換様式をA（互酬）、B（再分配）、C（商品交換）の3タイプに分類した。それらはA→B→Cの順に成立したが、成立したあとは新しい様式が成立しても消滅することはなく、ただ社会の支配的な交換様式でなくなるだけだ。現在のようにCが支配的な交換様式になっても、Bは国家によって担われており、もしそれがなければCの作動も妨げられる。

Aは現在もとのままの形では家族など限定された場でしか作動していない。だが、ネーション（国民）という「想像の共同体」として、Bを担う国家とCの作動する市場にとって不可欠の交換様式となっている、と柄谷は考える。

個人に置き換えて言うなら、たとえば後期高齢者の私の中に、泣き叫ぶ幼児が、甘いものを欲しがる小学生が、大人のまねをしたがる中高生が、キレてはつまずく青年が、ものがわかってきたとうぬぼれる中年男が、時どき心と体をもつれさせている老人が雑居し、それぞれの存在を主張しながら相互依存しているのと似ている。

産業資本主義の発達は「国民国家」を発達させ、第1次世界大戦で古くからの「帝国」を衰退させた。帝政ロシアのロマノフ朝は亡びた。だが、ロシアはソ連の成立によって新しい形の「帝国」として復活した。現在のポスト産業資本主義は「国民国家」の境を越えて経済のグローバル化を進展させ、「帝国」としての中国を巨大化させた。近代的な「国民国家」の誕生は、前近代的な「帝国」の退場を意味するのではなく、逆にそれを勢いづけている。

ニュース日記　853

中村　礼治

「帝国」の復活